

宇都宮市大谷地区を事例にまちづくり学習を考える[†]

陣内 雄次*・渡邊 真弓**・上田由美子***

宇都宮大学教育学部*

宇都宮大学教育学研究科**

NPO 法人宇都宮まちづくり市民工房***

梗概

わが国は、超少子高齢化、人口減少という他諸国が経験したことがない縮退社会という課題に直面する。そのような中で、持続可能な地域社会を形成していくために、今まで以上に地域資源に着目したまちづくりが必要とされてくる。これからのまちの将来は子どもたちが担い、築き上げていくのである。そのような意味でも、子どもを対象としたまちづくり学習の実現・発展が必要となる。

そこで本稿では、2012年6月から宇都宮市大谷地区にて、地域資源を活かしたまちづくり学習の実践を行い、今後のまちづくり学習の可能性を検討し、一つのモデル提案となることを目的とした。まちづくり学習を通して、子どもたちは、地域資源を捉える視点から地域を見直す力、考え抜く力、発言する力、協働でコースを作り、地域の方との意見を行うことでチームワークを獲得したと考えられる。これらが子どもたちにとって貴重な経験となり、地域を見つめ、また新たに自己を見つめる一つのきっかけとなったのではないかと考えられる。

キーワード：ESD、まちづくり学習、まち学習、地域教育、地域資源、大谷

1. はじめに

(1) 研究の目的・意義

わが国は、超少子高齢化、人口減少という他諸国が経験したことがない縮退社会という課題に直面する。そのような中で、持続可能な地域社会を形成していくために、今まで以上に地域資源に着目したまちづくりが必要とされてくる。その際の重要なポイントは、行政依存ではなく、地域住民が地域資源の重要性に気づき、能動的にまちづくりに関わっていくことである。

また、2011年3月11日の東日本大震災からの復興、これから起きうる震災に向けた対策の必要性も加わり、まちづくり自体に対する関心・必要性はさらに高まっている。甚大かつ深刻な状態からの復興を急ぐことは当然であるが、しっかりと未来を見据えたより良いまちづくりを進めることが重要である。経済・産業機能の回復も急務となるが、そういった

中でも子どもの成育環境という視点が欠落してはならない。なぜならば、これからのまちの将来は子どもたちが担い、築き上げていくのである。そのような意味でも、子どもを対象としたまちづくり学習の実現・発展が必要となる。そこで本稿では、宇都宮大谷地区にて実際にまちづくり学習のプログラムを立案、実践した報告を行い、そこから今後のまちづくり学習の可能性を検討することとする。大谷地区には世界に誇るべき大谷石という地域資源がある。しかしながら近年その需要は減少し、地域に今ひとつ元気が無い状態である。そこで、今ある大谷町の課題解決と、すばらしい地域資源を生かすまちづくりを子どもたちとともに考えていくことにした。

(2) 調査方法

宇都宮市大谷地区にて展開できるまちづくり学習のプログラムを立案、実践した。

その後、本研究で提案するまちづくり学習の可能性と課題について検討するため、現場の家庭科教員に対して聞き取り調査を行った。

2. 本研究におけるまちづくり学習の概要

(1) 本研究におけるまちづくり学習プログラムの目的

本プログラムでは、家庭科教育におけるまちづくり学習のあり方を、学校と地域の連携を図った実践

[†] Yuji JINNOUCHI*, Mayumi WATANABE** and Yumiko UEDA***: A study on Community Design Education through Practice in Oya Area, Utsunomiya City.

* Faculty of Education, Utsunomiya University

** Graduated School of Education, a graduated school of Utsunomiya University

*** Utsunomiya Machizukuri Shimin Koubou

プログラムを通して検討することとする。その実践例を大谷地区での地域資源を生かしたまちづくり学習として提案する。

子どもたちの学習中の様子や授業に対する感想において、本プログラムがまちづくり学習のモデルとなり得るのか、家庭科教育の目標達成への一助となりうるかどうかを検討する。また、この取り組みが一つのモデル事業となり、市内それぞれの地区で、大谷での実践モデルを参考に、子ども参画のまちづくりが進み宇都宮市の持続可能なまちづくりへと発展していくことを望む（図1）。

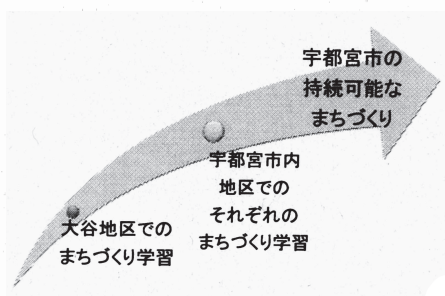


図1 本プログラムの到達図（筆者作成）

（2）本プログラム実践の対象

宇都宮未来クラブ（以下UFC）に所属する中学1年生5～7名である（それぞれの回で参加人数が異なる）。

地域発信で行うため、地域の子どもたち（中学生）を対象に展開したかったが、部活動等との兼ね合いで人集めが困難を極めた。そこで、UFCの中学生に協力をしてもらい展開した。

（3）本プログラム対象選定理由

家庭科は、学校教育の中に、教科として小学校から高等学校までの6ないし7年間に渡って位置づけられている。高等学校への進学率が97%（2013年現在）となった今日では、ほとんどの子どもが6ないし7年間家庭科を学ぶことになる。

中学校の家庭科は、青年前期の生徒に人間および人間の生活に関する理解を深め、生活に必要な知識と技術の基礎的なものを習得させて、われわれの生活を明るく豊かにするための工夫・創造の応力および実践的な態度を育成するための必修科目である。したがって、小学校で学んだ家庭科およびそれに関連した教科の基礎のうえに、一層創造的、実践的に活動できるように、生活に必要な基礎的・基本的な知識と技術を習得させることを目指している。ここにおける生活を支え、生活に必要とされる技術とは、科学的理解にとどまるものではなく、常に実習・実

践して学習させるべきものである。

近代科学による技術の進歩はめざましく、そのすべてを中学校で学習させることは、時間と生徒の能力からも不可能であり、かつその必要もない。これから無数の技術の中から、生活に密着したものでかつ生涯にわたって必要な技術を探り上げるとともに、最も基礎的・基本的で、生徒の興味や能力にふさわしいと思われるものを、教科の内容として選び出したものでなければならない。

技術・家庭科では、地域や学校の実態および生徒の必要ならびに男女相互の理解と協力を図ることを考慮し、各学校が生徒の興味、関心、能力、適正を配慮しながら履修させるようになっている。

しかしながら、小学生から中学生に上がった時、子どもたちが地域の活動から離れて行くことも指摘されている¹⁾。また、栃木県教員に対して行ったアンケート調査結果で、中学校の教員がまちづくり学習についてもっとも必要性を感じておりながら、その実践にまで至っていなかった²⁾。そのような中で、地域との関わりをより強く意識させ、実習・実践を通して学ぶことの意義が中学の家庭科でより重要視されると考えたため、中学生を選定した。

3. 本研究におけるまちづくり学習の内容

「Oya マチツクリ 大切な人と行きたい大谷」

（1）コンセプト

子どもたちが、自分たちが考える「大切な人」と行きたくなる「大谷」を考える。身近な大切な人を具体的に想像しながら、これからの大谷のまちづくりを考える。

（2）ねらい

地域資源あふれる大谷地区で、地域資源に着目したまちづくりを、大切な人と行きたくなるようなプランを子どもたちに考えさせる。自分たちだけでなく、自分たちが大切にしている人にも一緒に来てもらえる大谷を考えることにより、地域に対する想いが強くなると考えられる。また、子どもたちが考えたプランを地域内外の大人たちに発表をし、よりよい大谷の未来を考える。

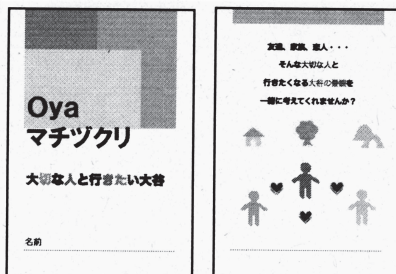


図2 本プログラムパンフレット（筆者作成）

(3) 実践の方法

本学習プログラムでは、地域をフィールドに展開したが、今後学校教育でも展開が出来る様に、中学校での授業展開(家庭科、総合的な学習の時間など)を想定し、50分×全8回のプログラム設定を行った。

(4) 実践の日程

本学習プログラムのタイムスケジュールに関しては、表1に示す。

表1 本プログラム日程一覧

回	日時	内容	中学生参加人数	サポーター数	備考
第1回	2012.6.16(土) 9:00~9:50	オリエンテーション、住居についての講義	5名	5名	・宇都宮大学教育学部陣内教授による講義 ・城山地区市民センターにて
第2回	2012.6.16(土) 10:30 ~ 11:20	まち歩き(1)、プランニング準備	5名	5名	・城山地区市民センターにて
第3回	2012.7.14(土) 9:00~9:50	コースプランニング(1)	4名	5名	・城山地区市民センターにて
第4回	2012.7.14(土) 10:00 ~ 10:50	ゲストスピーカーによる講話	4名	5名	・大谷資料館館長館野氏 ・民家集田邸にて
第5回	2012.7.28(土) 9:00~10:50	まち歩き(2)、コースプランニング(2)	4名	5名	・建築家塩田氏と共にまち歩き ・城山地区市民センターにて
第6,7回	2012.8.9(木) 10:00 ~ 12:00	発表会準備	4名	3名	宇都宮大学内
第8回	2012.8.11(土) 9:00~10:00	発表会	7名	3名	・地域の方4名参加 ・城山地区市民センターにて

(5) 実施内容

a. 授業の対象とする範囲

住生活領域の全ての時間を利用する想定の実践であったため、「まち」のみならず建物内も含めた住環境すべてを授業の対象をすることとした。

b. 目標の設定

2012(平成24)年から実施される中学校学習指

導要領によると、技術・家庭科の、家庭分野の目標は、「衣食住などに関する実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な基礎的・基本的な知識と技術を習得するとともに、家庭の機能について理解を深め、これからの生活を展望して、課題をもって生活をよりよくしようとする能力をと態度を育てる。」(傍線筆者)とされている。傍線部分の説明として、中学校指導要領解説技術・家庭編では、「(前略)中学生の時期は、生徒が生活の自立を目指す中で、人々に支えられて生活していることに気づくことや、自分も家庭生活を支える一員としての自覚をもち、生活をよりよくしようとする態度を育成することが大切である。そのためには、生徒が家族・家庭や衣食住、消費・環境などの内容について個別に捉えるだけでなく、生活全体を見通し、総合的にとらえて課題を解決する方法を見出すなど、よりよい生活の実践に向けて学習を進めて行くことが重要である。また、家庭生活を主体的に身につけ、将来にわたってよりよい生活を営むための基礎となる能力と態度を育むよう配慮する必要がある。」(傍線筆者)とされている。

ところで、住生活を総合的にとらえ、将来にわたって主体的によりよくするためには、まず、住環境における様々な気づきが欠かせない。普段無意識に過ごしている住環境についての事象を意識化し、それをもとに課題を見出せるようになることが、生徒が住生活をよりよくできる一歩である。見出した課題をもとに維持・改善策を主体的に考える力をつけることが重要である。他人から与えられた維持・改善策を無条件に受け入れ実行するだけでは、主体的に住生活に関わっているとは言えないことは明らかであるし、家庭科教育において住生活に関する生涯学習の基礎を築いておく必要があると考えられるからである³。なお、「主体的に考える力をつける」とは、具体的には自分で考えるための手段や方法を知ることなどが考えられる。

さらに住生活を個別にとらえるのではなく、生活全体を見通すためには、まちへの視点が欠かせない。そのまちをよりよくしようとしたときに、他人任せでは信の意味での実現は期待出来ない。自分たちのまちについて改めて見つめ直し、そこから自分たちの地域にある資源に着目し、自分たちのまちについて課題を見つけ、その解決を目指して自分なりに工夫し創造することが重要である。また、自分たちの考えを他の人と共有できるようなコミュニケーション力、情報発信力を身につけさせることは、教育課程における「生きる力」において重要な項目と考えられる。

以上の意識より、今回の実践の目標を以下のように定めるとこととした。

・住居、まちに関する基礎的知識を身につける。(知識・理解)

- ・自分たちの地域にある資源に着目し、自分たちが大切な人と行きたいまちを考える。(関心・意欲・態度)
- ・自分たちのまちについて課題を見つけ、その解決を目指して自分なりに工夫し創造する。(工夫・創造)
- ・自分たちが考えたまちの考えを他の人と共有できるようなコミュニケーション力、情報発信力を身につける。(生活の技能)

c. 授業計画

第1回では、オリエンテーションとして、プログラムの趣旨、ならびに自己紹介を含むアイスブレイキングを行う。アイスブレイキングの内容は、①好きな物(特に分野は決まらなかった)、②住んでみたい部屋、家、まちとはどんなものか、を個人で考えた後、ペアを組み伝え合う。その際の注意として、どれだけ相手に自分の想いを具体的に伝えられるか、相手の想いを汲み取れるかを意識して行わせる。なぜならば、本プログラムでは、自分たちの想い描くまちを説明発表し、地域の方との意見交換を行うことを最終の到達点としているため、その練習となるようにする。

その後宇都宮大学教育学部陣内雄次教授を講師として、まちをつくり上げている、住まいについての基礎的な学びを行う。小学校家庭科の振り返り、また、中学校家庭科、高校家庭科への繋がりを意識した内容とし、無意識に過ごしている住環境における事象を意識化させる。

第2回では、各自大切な人を設定し、行政が発行している大谷のまちマップを参考にしながら、2人1組でカメラを持って、まち歩きを行う。そこで、自分たちが良いと感じた所、そうでないと感じた所など「大谷らしさ」を写真におさめさせる。実際に自分の目で、好ましい所とそうでない所を確認することで、まちにたいする意識化を行う。また、友達と共に学習を行うことで、まちに対する好悪の感じ方は人それぞれであることを知ることができる。それは、自分にとって良いと感じたことも他人にとっていいものとは限らないことを知り、公共の場をみんなにとってよりよくするためには、意見交換が必要であることに気づききっかけとなるはずである。

第3回では、前回まち歩きをした際に感じたことを写真と共に振り返り、設定した大切な人と行きたくなる大谷のコースのコンセプトをチームごとに立てる。チームは大切な人が似ている者同士を合わせる。コンセプトに合うコースを写真、地図、マジック、ポストイットを用いながらプランニングし、その際にサポーターの学生に各チームに入ってもらい、中学生の思いやアイデアを具現化できるアシストをしてもらう。

第4回には、大谷に携わり、想いを持っている大谷資料館館長館野氏をゲストスピーカーとしてお呼

びし、資料館を開く経緯や、大谷について、今後の大谷に対する想いなど、子どもたちと近い距離で語っていただき、子どもたちが単に自分たちが作りたいまちを作るのではなく、これまでの歴史等を踏まえてこれからのまちを作るヒントとなることをねらいとする。

第5回には、もう一度今までの情報等を整理するために、建築家の塩田氏を講師に、各チームが考えたコースをイメージしながらまちを歩く。

第6回、7回には、その後再度プランニングを行い、発表会に向けて準備を行う。その際に、コースを実現可能にするために自分たちでできることは、何であるのかを考え、次に自分たちだけではどうしようもないことは誰にどのような協力を求めたらよいのかを考えるという段階を踏む。そうすることで、身近なまちの維持・改善をするためには、まず自分たちの関わりが重要であること、自分たちにもできることがあること、また、協力を求めなければできないことがあることを知ることができる。また、快適に暮らすためにはどうすればよいのかを考える手だてを身につけることができるのである。

第8回の発表会には、地域の方も参加してもらい、子どもたちの発表を聞いてもらう。主体的に関わり、よりよいものにしようとした意欲を、地域の人にも伝えることによって、さらなる意欲向上をねらい、地域の方も新しい発見や学び、刺激を受ける機会となることを望む。

d. 授業内容検証

授業後の聞き取りでの内容をまとめた(表2参照)。

表2 授業後の子どもたちの意見一覧

授業回数	ネガティブ	発言	ポジティブ
第1回	部屋だけキレイにしていればいいと思った。まちって意識したこと今までなかった気がする	伝えること(好きな物や自分が住みたい部屋など)って意外と難しかった。共感してくれるととても嬉しかった。今まで自分の部屋の中のことくらいしか考えてはいなかったけど、まちに住んでいるんだあって感じた。大谷ってそんなにすごいところなんだ。家の中も外も『安全性』っていうのが大切で、でもそれは一人じゃつれないって思った。誰かがやればって気持ちでは、なかなか快適さとか安全はできないと思った	
第2回	初めてゆっくり大谷を歩いたけど、ゴミが多かったと思った。今のままだと大切な人という自分すらあまり来たいと思わないかも・・・写真撮るのを忘れていたり、コレ隠してもいいのかな?とかちょっと違うことがあった。ゴミがたくさんあった。服がばーばーだった	まち歩き楽しかった。大谷を歩くのは3回目だけど、前は「大切な人と行きたい大谷」っていうテーマではなかったから、今回はそのことを意識できた。たくさん自然があるところ。なんか歴史を感じた。石の道力ってすごい。石で出来た建物がたくさんあって面白いと思った。使われていない工場みたいなところとか、大谷石がたくさんその辺に置いてあって、整えればいいのにな、と思った。もったいないなーと思うところがたくさんあった	
第3回		大切な人とデートするコースを考えるってなんか楽しい。大谷を歩いたものにしなよ・・・やっぱ石だよな。具体的に欲しいお店を考えたり、メニューまで考えられたり面白かった。食べ物屋さんやお店は欲しいけど、でも大谷はマップとかそういうのじゃないんだよな。今あるものを活かす方法をたくさん考えた。新たに〇〇スポットとか作っちゃおうと思う。友達とやることで、面白いことがどんどん出てくるような気がした。あっという間だった	
第4回		大谷がたくさん有名な人が来て、撮影とかをしているのを知ってびっくりした。面白かった。「(館野さんは)とても優しい人だと思った。このお家(館野家)すごい!迫力がすごい!楽しい。私の大切な人は家族で、館野さんも同じように奥さんって家族を挙げているのがなんだか嬉しかった。大谷石は引き立て役っていうのは、とっても納得した。頑張って貰ったから、頑張ります!すごいものをつくりたいです	
第5回	なぜ同じところをも	もう一度歩くことでこの間は見落としていたところを知	

	一回歩かなきゃいけないの、暑かった…、同じところで見飽きた	いた、渡邊家住宅がすごかった、(渡邊家で) 倉をギャラリーにしていて、しかも手作りってすごいと思った、お茶畑を見つけたのが良かった
第6、7回	もっと時間があればよかった、イラスト描くのが大変だった	文章にするの難しい、伝わるかな?、絵を描くのが面白かった、私たちに草むしりとかしかできないけど、それが大切な人で行きたいと思うところの大切な部分だと思う、地域の人に聞いてもらうのはドキドキするけど、自分たちがやったことを見てもらえるから楽しみ
第8回		それぞれ大切な人が違うからだろうか。家族が大切な人は、家族と一緒にいった楽しいコースになっている。いろいろな人で行っても楽しめる大谷はすごいと思う。悪い所を改善すればもっともっとすばらしい大谷になると私は考えた。もちろん、注目されていないけど、良い所もたくさんある。そこをアピールしていけばさらによくなるのではないだろうか、地域の方々の協力も必要になってくると思います。なので今日は地域の方々にたくさん意見を頂いて良いと思いました。なので、今日のようないい機会がまたあれば良いと思います。自分たちが考えていたことよりも多く、地域の人たちから「もっとこうしたい方がいい」、「こうするといーいじゃないの」などの意見が出されて、自分のためにもなったし、人の意見を聞いて納得できる部分とかがあったので、参加して良かったと思います。友達の発表では、1つ1つのコンセプトや大切な人が違うので、コースの見方も違っていた。逆にそのアイディアが自分たちの意見の参考になったり・・・と助け合いができたのかな? 「子どもたちの意見」を聞いていた地域の方に感動!! 地域の方々は、きちんと大谷のことを考えていることが伝わりました

第1回目の発言からは、子どもたちにとって住まいは家、とくに自分たちの部屋という狭い範囲での認識であったことがうかがえる。授業を受けて、少なからず住まいやまちという視野の広がりが出発点が子どもたちの中に出来たように思われる。また、一人ではなく、また他人任せではなく、自分たちも関わっていくことの重要性に気づき始めた。

第2回目の発言からは、地域資源を捉える視点が培われてきているようであった。しかしながら、「～がある」という実態調査に終わってしまっているものも見受けられた。「整理すればいいのに」とまだ自分とは切り離して他人任せの発言もあったことから、まだ主体性の醸成は成されていないように思われる。

授業者側から何度も「大切な人で行きたい大谷」というテーマを言っているため、第3回目の発言からは、「大谷」という地域を強く意識したものが多くみられた。「大谷にはマックではない」という発言はとても興味深かったと感じた。これは、「食べ物屋さん欲しい」という子どもたちの発言を受けて、授業者が「どのようなところ? 普段みんなが行くようなところ? マックとか?」という質問に対する回答であった。確かに子どもたちが普段行くなじみがある場所はチェーン店で価格が安いとことであるが、それを大谷にただ作るということは、違うという。そこは地域にあった独自の店でないといけない、という強いこだわりがうかがえた。地域に対する思いが子どもたちの中で回を重ねるごとに大きくなっていると考えられる。また、第3回目、第4回目は、柴田邸で行ったため、その空間からの刺激は大きかったと思われる。

第4回目の発言からは、ゲストスピーカーの話が、大谷という地域への理解を深め、さらに直接メッセ

ージを受けたことで、子どもたちの意欲向上がみられた。

第5回目では、もう一度歩くことによって、新発見が何人かには見られたが、もう一度行くことに対して少々飽きていたことも伺える。

第6回、7回目の発言からは、表現することに対して難しさや面白さを感じており、自分の思考を他者に伝えるための表現力が培われていたと考えられる。また、役割を考えたことにより、主体的にまちに関わろうとする力も見てとれた。次回が発表会ということで、大人を相手にすることに対しての緊張と期待がうかがえ、やはり大人から認められることは子どもにとって重要な意味を持つと考えられる。

第8回からの感想文からは、大切な人をそれぞれ異なる設定をした面白さを感じていたようである。また、「注目されていないけど、良いところもたくさんある」と述べており、自分たちがまち歩きをして感じたことならではだと考える。また、地域の方との意見交換に対しての満足度は高く、意見交換の重要性、協働性などを感じ取っていたと考えられる。

全8回の授業を通して、子どもたちは、地域資源を捉える視点から地域を見直す力、考え抜く力、発言する力、協働でコースを作り、地域の方との意見を行うことでチームワークを獲得したと考えられる。また、友達はもちろん、地域の方や大学生たちと関わることで、視野の広がりや人との繋がりが新たに作られた。これらが子どもたちにとって貴重な経験となり、地域を見つめ、また新たに自己を見つめる一つのきっかけとなったのではないだろうか。



図3 まち歩きの様子

図4 プランニングの様子



図5 発表会の様子 (筆者撮影)

(6) 検証

2012年11月20日に宇都宮市が主催する「大学生によるまちづくり提案」にて、本プログラムを実例として、まちづくり学習の提案を発表した。

宇都宮市内の大学から10の提案が成された。その中で本プログラムを実例としたまちづくり学習の提案が第3位に入賞した。他の提案が具体的可視化

できるような構造物等であったなかで、可視化できない人材育成というソフトの提案が入賞できたことの意味は大きいと考える。

講評では、「教育的視点からのまちづくりへの提案は重要である」と考える。しかし、汎用可能であるかどうかの課題等が残り、これからの展開に期待される」とのことであった。実際に発表を聞きにきた審査権を持った方々からは、「子どもたちに対してこのような取り組みをやるのが非常に重要だと思う」、「未来を担うのは子どもたちであるから、このような視点は欠かせないと思う」というような声をいただいた。このことから、子どもの視点を取り入れたまちづくり、子ども参画のまちづくりの重要性や可能性を多くの方が感じてくれたといえるであろう。

b. 現場の家庭科教員に対しての聞き取り調査

実践を踏まえて、中学校で展開するために、以下のような指導案を再度作成し、それを現役の教員に見せて、評価、添削をしてもらった。今回、中学生を対象として展開したので、中学校の現役の教員に対して聞き取りを行った。

まちづくり学習について、本プログラムの実践について説明した後、本指導案を添削してもらった。その後の第一声は「これは総合的な学習の時間で行う方がいいのではないか」という指摘であった。やはり限られた家庭科、住居領域の中では、とても困難とのことである。また、学習指導要領の中で住生活で達成すべき目標をこの指導案ではクリアできないとのことであった。学習指導要領では、中学校技術・家庭科の中の住生活の目標は「ア 家族の住生活について考え、住居の基本的な機能について知ること。イ 家族の安全を考えら室内環境の整え方を知り、快適な住まい方を工夫できること。」とあり、本指導案では、1時間目のほんの10分少々のみで、ここを網羅するというのは無茶な話である。学習指導要領内では、あくまでも「室内」についての記述しかないので、この指導案の内容だけで住生活領域を学ばせるのは難しいと思うとの評価であった。学習指導要領に沿った内容にするには、室内の住環境について2、3時間学んだのち、2時間程度のまちについての学習を行うことが実現可能な範囲であるという。なおその場合は、フィールドワークは不可能であるので、宿題や夏休み等の長期休暇の課題で、まち歩きを課して「維持または改善点」を見つけるようにするしかないという。家庭科の時間内では、実現困難であるので、家庭科で住まいについての基礎的勉強を終えた後、クラスもしくは学年ごとの総合的な学習の時間で、家庭科の視点を広げながら授業展開をしてはどうか、という提案であった。

【添削指導を受けて】

まず、住居領域でも体験的なワークを取り入れる

こと、また視点を外に広げて違いを目で確認することで、生徒の興味関心を引くことができるということが示唆された。

そして、目標の設定、内容において、学習指導要領との内容に沿わないという指摘であった。目標を設定する際には、中学校指導要領解説技術・家庭編に記載されている、「生活全体を見通し、総合的にとらえて課題を解決する方法を見出すなど、よりよい生活の実践に向けて学習を進めて行くことが重要である。また、家庭生活を主体的に身につけ、将来にわたってよりよい生活を営むための基礎となる能力と態度を育むよう配慮する必要がある。」を受けたつもりであったが、住居領域になるとその範囲内とは、「ア 家族の住生活について考え、住居の基本的な機能について知ること。イ 家族の安全を考えら室内環境の整え方を知り、快適な住まい方を工夫できること。」となり、かなり視野が狭くなっている。よって、まちづくり学習は学習指導要領からははずれてしまう。学習指導要領の内容を達成するべく、住環境についての学びを再度練り直す必要があるといえよう。

また、家庭科での住居領域に割ける時間数は6時間程度ということで、その中で、まち歩きというフィールドワーク、プランニング、ゲストスピーカーの講話、発表会という内容をこなすことは厳しいといえる。

c. 「oya マチヅクリ★イベント～大切な人と考える大谷の未来～」

2012.11.18（日）に、本学習プログラムの発表会メインとする2時間のイベントを大谷地区にて行った。

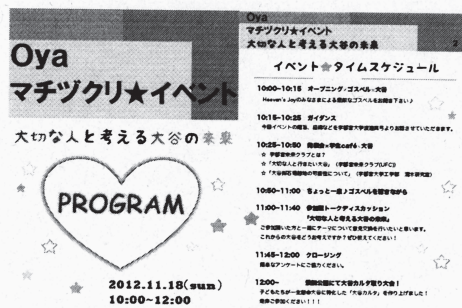


図6 本イベントプログラム
(筆者作成)

まちづくりにおいて重要な点で「情報発信」が挙げられると考える。情報発信とは、まちの魅力やまちの取り組みを伝え、多くの人を巻き込みながら、まちづくりを展開していくためには欠かせない視点であり、かつ多くの地域が課題としている部分である。

それを踏まえ、開催趣旨として三本柱を立てた。

第一に、まちづくり学習の発表の場とすること。第二に、その発表を聞き、子どもや学生のまちづくり参画について、地域の方、保護者の方に知ってもらうこと。第三に、大谷地区に何かを掛け合わせるこの可能性を参加していただいた方に感じてもらうこと。それを趣旨ならびに目標として準備、当日運営にあたった。

4. まとめ

(1) まちづくり学習「大切な人と行きたい大谷」

展開フィールドを栃木県宇都宮市大谷地区として、家庭教育におけるまちづくり学習のあり方を、学校と地域の連携を意識した実践プログラムを通して検討することを目的として、全8回のまちづくり学習を展開した。

各授業における子どもたちの様子や聞き取り調査、最終回の感想文から総合的に考察すると、全8回の授業をとおして、子どもたちは、「大切な人」、「大谷」というものを強くしながら、地域資源を捉える視点から地域を見直す力、考え抜く力、発言する力、協働でコースを作り、地域の方との意見を行うことでチームワークを獲得したと考えられる。

プランニングを重ねると「あっという間だった、もっと時間が欲しかった」という発言もみられ、これは真剣に取り組んだからこそではないだろうか。

グループによる作業で、大切な人の大枠が同じもの同士、まち歩きでの学習を共有しながら互いの意見を尊重し合う姿が見受けられた。また、「大谷を活かしたものにしなければ」という発言にもあったように、「大谷らしさ」というものを子どもたち自身が感じており、地域資源をみる目が養われたように思われる。抽象的なイメージも、サポーターとの近い距離でのディスカッションを経て、具体化しており、適切投げかけの重要性を改めて感じた。

自分たちのコースを実現させるための役割分担まで考えたことで、「私たちができることって少ないけど、でも意外に一番大切なところなんじゃないの」という発言から、自分たちが出来る役割を考えるだけでなく、「大切な人と行きたい」という今回のまちづくりのメインテーマにおける役割の重要性までを感じていたように思われる。子どもたちは主体性を身につけ、自分たちも、まちをよりよくするために、何等かのアクションを起こすことができ、まちづくりの重要な一員であることを感じる事ができたのではないだろうか。

また、「大学の先生」という普段あまり接する機会のない職業を持つ人の登場、歴史ある普段見慣れない平屋建ての柴田邸、ゲストスピーカーとして資料館館長という大谷には欠かせなくかつ特殊な職の大人と関わることが、非常に子どもたちの授業に取り組む意識を高めるのに有効であったと思われる。

そして、地域の方が発表を見に来てくれるという

ことで、非常に子どもたちの刺激になっていたように思う。感想にもあったが、地域の人が自分たちの意見を真剣に聞いてくれたことに感動しており、それは子どもたちの達成感、自己肯定感にもつながったと考えられる。そうした相互の意見交換が、発言する力、理解力をさらに深めており、非常に大切なことであると改めて実感した。地域の人にとっても、子どもたちが一生懸命に地域について考えたという思いが伝わり、非常に刺激になっていたように思われる。

したがって、本実践では、中学校家庭科の目標を課題を残しつつも大筋においては、達成することができるものであったと思われる。

しかしながら、現場の教員からは、まちづくり学習は学習指導要領の住居領域からははずれてしまうという指摘があり、学習指導要領の内容を達成するべく、住環境についての学びを再度練り直す必要があるといえよう。また、家庭科での住居領域に割ける時間数は6時間程度ということで、その中で、まち歩きというフィールドワーク、プランニング、ゲストスピーカーの講話、発表会という内容をこなすことは厳しいといえる。そのため、限られた時間のなかで最大限の効果的な学習を行うために、どの部分を削り、どの部分を十分に引き上げていくかを再検討する必要がある。総合的な学習等他教科とのクロスカリキュラムでの展開も視野にいれなければならないであろう。

さらに今回は「大切な人と行きたい」という視点に留まってしまったため、住環境の最終地点「住まう」というところまで視点が落とせていなかった。ただ、「住まう」という行動に移すには、「地域への愛着」、「地域への理解」といった意識醸成がまず何よりも大切であると思う。地域を大切に想いながら、その地域へ住まう、そしてまた住んでいる地域に誇りを持つ、というサイクルが成されて初めて持続可能な地域ができてくると考える。今回のプログラムを通して、子どもたちは「大切に思う」という視点で大谷地区という地域を見つめ直せたと考えられる。

(2)「oya マチヅクリ★イベント〜大切な人と大谷の未来を考える〜」

前述のまちづくり学習プログラムの集大成とし本イベントを開催した。

参加者に対してイベント終了時に配布したアンケート調査の結果より、参加者のほとんどが、今回の子どもたちが取り組んだまちづくり学習「大切な人と行きたい大谷」について、肯定的な意見であった。その理由として、「地域を育てる（住まいの地域）原点は子どもを育てること、その地域に関心を持ち考えられることが大切。(70代)」、「みんなで地域のことを考え、意見を出し合うことは良いことだと思った。それを自発的に考えてくれれば良いと思う。(10

代・学生)」、「まちをつくるのは、これから大人になる子ども達。より若い世代を中心に、大谷の素敵な所を発見していくべきだと思う。(20代・学生)」、「子どもは、半分遊び的要素が入っていた方がよいので、こういう手法はいい。(50代・主婦)」、「自分たちの文化に真っ直ぐに目を向けようとしている。(20代)」、「自分の住んでいる地域のことを自ら考える機会となる。(60代・コンサルタント)」などがあげられた。このように、未来を担う子どもたちが、自分たちのまち・地域を考えることの重要性を感じており、子どもの視点だけではなく、そこに大人も加わることも大切であると考えていることが分かる。まちづくり学習についての理解は高いと考えられる。

また、まちづくり学習を行う上で、「地域」の協力がもっとも重視されていることが分かった。次いで「学校」であった。特に10代が「学校」と回答している割合が高く、生活の範囲や視野が狭いからこそとも考えられるが、まちづくり学習を学ぶものの意見として捉えれば、一部ではないすべての子どもたちにまちづくり学習を展開させるには、やはり学校での展開が望ましいと考えられる。

イベントに対して地域の方から感謝の言葉をもらうことができた。大谷地区以外の方からも肯定的な感想をもらえた。後半部分にトークディスカッションを行ったことで、参加者自らも改めて大谷のまちについて考える機会となり得たことも自由記述に示されていた。

「大谷という土地を愛している人がまだたくさんいるということ、その情熱を感じられ、今後も関わって行きたいと思いました。(20代・学生)」という感想に表れてように、本イベントにて、多くの人が大谷という地域を知る機会、見直すきっかけとなり、まちづくりの情報発信の一助、また地域資源に着目したまちづくりへの一助になり得たと考えられる。

5. おわりに

まちづくりへの子ども参画は、子どもの当然の権利であること、子どもへの教育効果が認められること、子どもの発想の貢献度が大きいことである。まちづくりに子どもが参画するための基礎的力を培うためには、子どもにまちづくり学習の機会を提供することが鍵を握っていると言えるが、その際多教科の視点を取り組んでいくことでより効果的な学習になることが期待できる。ただしそこには、人・自分の生活空間としてまちを捉える視点を欠くことはできない。

子ども参画のまちづくりを、まちづくり学習として位置づける上で、「まちづくり学習マップ」を作成した(図7)。

まちは、個々人の暮らしの集合体であるので、個々人の暮らしからの視点がスタートとなる。その後、個の生活から、視点を広げ①まちを知ること、②ま

ちを題材として話し合うこと、

③その結果を受けてまちのために動き、これまでと見える世界が異なり、④視点を換えることができると考える。新たな視点によって、⑤さらにまちへの関心を高めることになり、また個々人の暮らしに立ち返り、個人の生活をもまちをも良くするサイクルが続くと考える。

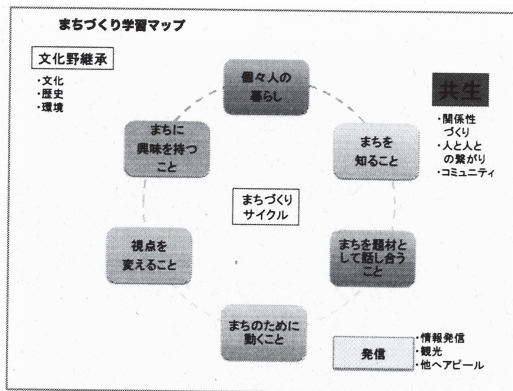


図7 まちづくり学習マップ
(筆者作成)

また、図のサイクルを回すことで、人と人、個人と社会の繋がりという「共生」を学ぶことができ、それら全体を通して文化の継承、創造がなされると考える。

なお、今回地域発信で実践を展開したが、それは、地域、大学(大学生)、行政、民間、学校の協力体制なしには成し得なかった。そうした経験も踏まえ、学校教育の場へのまちづくり学習の導入に関して、地域社会においては、大学やNPOやボランティア団体などにおいて、まちづくり学習のサポートが行えるような体制(学校と授業協力者とのコーディネーター役を務めるような団体を存在させる、授業協力者の情報提供システムを確立させる等)を整えることが必要となってくると考える。学校教育の場における課題は、クロスカリキュラムにてまちづくり学習を検討すること、学校への協力者を受け入れる窓口をつくる必要があると考える。

1 陣内雄次・玉虫章一郎・上田由美子『地域からの学びと育ち(第2報)―宇都宮市を対象として―』宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 第30号 2007年

2 陣内雄次・渡邊真弓・上田由美子『まちづくり学習の可能性と課題に関する一考察―宇都宮市大谷地区を事例として―』宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 第35号 2012年

3 北方建築総合研究所インタビューより